

# 『史記』項羽本紀考

柴田 昇

A Study on *Shiji Xiang Yu Benji*

SHIBATA Noboru

## 1 はじめに

秦末の反秦抵抗運動の過程で陳勝集団にやや遅れて会稽で蜂起した項梁を中心とする武装集団は、数ヶ月後には陳勝政権の一翼として西進を開始した。そして短期間に旧楚領域の武装集団との連合を繰り返して十数万の大軍に膨れ上がった。また陳勝死後には、項梁は旧楚王家の末裔を楚王に擁立して楚国を復興する上で中心的な役割を果たした。楚国復興から間もない時期に項梁は秦の章邯軍との戦闘で戦死するが、そのあと甥の項羽は秦軍を打ち破り入関し、秦王嬰を誅殺して秦帝国を最終的に滅亡させた。天下を制圧した項羽はいわゆる十八王の封建を実行するに至った。

以上は、『史記』に描き出された項梁・項羽の業績を略述したものである。秦末期の政治過程を考える上で項梁・項羽の存在感は大きい。特に項羽は、漢の高祖劉邦のライバルとしてしばしば小説・映画などの素材にもなってきた。また『史記』は項羽を本紀に列しており、それは後世においてしばしば批判の対象となっている。しかし、『史記』に対するそのような批判自体が後世の名分論的価値観に縛られたものであること、項羽本紀が『史記』の体例に合わない一篇とは言えないことは、既に指摘されている。項羽本紀という部分が設定されていること自体が『史記』の歴史意識・人物評価と密接に関わっており、『史記』にとって項羽が特別な人物として位置づけられていることの表現なのである。

筆者はかつて陳勝呉広の乱について検討を行い、陳勝政権活動期の政治的動向と陳勝政権に関する『史記』の記録の論理についての若干の仮説を提示した<sup>1</sup>。本稿では、陳勝政権の後をうけて実質的な天下統一を成し遂げたとされる項梁・項羽について記録した主要な史料である『史記』項羽本紀に関して、高祖本紀との比較を中心とする基礎的な検討を行いたい。本稿で行う作業は、別稿にて行う項梁・項羽集団に関する歴史的分析の前提となるものである。

## 2 『史記』の構成と項羽本紀

中国正史の筆頭たる『史記』の本紀に項羽が列されていることについては古くから多くの批判がなされてきた。班彪「略論」は司馬遷の文章そのものには高い評価を与えつつ、『史記』が項羽・陳勝を不相応に高い位置に記述したことを非とする<sup>2</sup>。班彪の子、班固は『漢書』において『史記』の文章を大部分は踏襲しながら、項羽を帝紀ではなく陳勝とともに列伝に排列した。劉知幾『史通』も項羽は霸王すなわち当時における諸侯なのに「本紀」に列するのは誤りとする<sup>3</sup>。近くは趙翼『廿二史劄記』が各史例目異同の項で「惟項羽作紀頗失当」として『漢書』の排列を支持している。シャヴァンヌも次のように述べている。

司馬遷は項羽に本紀中の一編をさいているが、項羽は数年にわたり漢と対立したとはいっても、漢に破られて王朝を建設するにはいたらなかったし、また楚王の位を継ぐべき子孫も残さなかった。項羽は本紀にも、世家にもおかるべきではなく、列伝にいれらるべきであり、班固の『漢書』ではそうになっている。<sup>4</sup>

以上、『史記』の構成に対して批判的な立場をとる諸説の論拠は基本的には、本紀は帝王の伝記・歴史であるはずなのに本人が帝王の座についたわけではない項羽をその中に列するのはおかしい、ということに尽きる。

これに対して比較的近年の多くの研究においては『史記』の構成を『史記』そのものの論理の中からとらえようとする立場が主流化している。ワトソンはこの問題について次のように述べている。

批判者は項羽の歴史を本紀の中に入れるのは妥当ではないと主張した。本紀は皇帝のために設けられるべきだと考えたからである。しかし司馬遷が本紀を編んだとき、そんな定義はもっていなかった。彼は「本紀」という名称を用いたのである。その名称を「帝紀」と改めたのは後世の歴史家であった。<sup>5</sup>

そして司馬遷は彼の「現実主義」に沿って、「実際の支配者について記す本紀に項羽の歴史を置いた」<sup>6</sup>ものとする。

これと同じく司馬遷のとった立場を積極的に評価するものとして、竹内康浩は「庶民から出て王朝支配をひっくりかえした古今未曾有の人物という点」を司馬遷が評価し、「そうした項羽の業績や運命に人知を越えた何ものかを感じていた」故に本紀扱いとしたとする<sup>7</sup>。吉本道雅は項羽・呂后に本紀を立てることや陳勝に世家を立てること等について、「これらの全てを『史記』の独創に帰することは疑わしい」とし、『史記』の構成と前漢初期の通念との関連を示唆する<sup>8</sup>。そして「『史記』そのものを史学史ないしは学術史に位置付けようという場合、班彪・班固父子のその如き儒家の物差しに基づく批判ということがそれ自体意味があるのか」<sup>9</sup>とする。

また藤田勝久は項羽本紀の構成を秦楚之際月表と比較・分析し次のように述べる。

『史記』項羽本紀の構成をみると、秦滅亡以降は漢紀年で表記されていながら、全体としては項羽に秦の天命を継ぐ人物という評価をみとめ、しかも項羽自身の行為によって滅

亡に至る位置づけがされていると判断できる。そしてこの評価は、秦楚之際月表で楚紀年を中心とする構成と共通している。ここから項羽本紀・月表の編集意図は、王者の紀年をもつ楚王と、それを継承した項羽をあわせて秦・漢をつなぐ時代とし、その興亡を位置づけることにあったと考える。……『史記』項羽本紀は従来いわれるように、著作の体例にあわない一篇ではなく、むしろ王者の紀年を重視し、天命と地上の行為の関連を原理として示そうとする太史令の立場からすれば、本紀にすることが必然であった。<sup>10</sup>

以上の諸説は『史記』の構成を、本紀はかくあるべしといった後世の定義によって批判するのでなく、『史記』自体が持つ内在的な論理と『史記』を成り立たせている歴史的な状況を踏まえて理解しようとする点において共通性を持つ。項羽本紀設定の理由については議論の余地があるにせよ、項羽が本紀に列されていること自体に対する名分論的な批判は、少なくとも『史記』を歴史的に理解しようとする立場からはもはや大きな意味を持たないと言ってよい。

『史記』自体の内在的な論理を理解しようとする立場と関連して、宮崎市定は司馬遷が「対立の中から新しい政権が生ずるものだ」という史観を抱き、その史観が生き活きと現れるように工夫をこらして、本紀を書きあげた<sup>11</sup>とし、「秦の始皇帝の後に、如何ようにして漢王朝の政権が樹立されたかを如実に示そうと思えば、その中間の橋渡しを勤めた項羽の事績を詳細に語るに如くはない。読者に対するサービスとして司馬遷は最善を尽したことになる<sup>12</sup>」として、読者を意識した叙述という観点から『史記』の構成を評価する。また叙述上の工夫という観点から夙に項羽本紀設定の意義について論じたのが武田泰淳である。

「項羽本紀」は、「高祖本紀」と並べて読み合わせるようにできていることが、他の「本紀」と異なっている。……「項羽本紀」と「高祖本紀」はたてに時間的につながっているのではなく、よこに空間的につながっている。……「本紀」の重点は項羽個人にあるばかりではない。高祖にばかり負わされているのではない。項羽と高祖という対立する要素の運動に重点があるのである。<sup>13</sup>

武田が指摘している、項羽本紀と高祖本紀の時間的並行性、及び項羽と高祖との対照性・相補性は、あらためて検討する余地のあるテーマであるように思われる。節を改めて、項羽本紀・高祖本紀に見える関連記事について具体的に検討してみよう。

### 3 『史記』の中の項羽と劉邦 (1)

『史記』項羽本紀冒頭部によれば、項梁は殺人を犯したために仇を避けて呉中に逃れており、項羽もそれに同行していた。項梁のもとには呉中の「賢士大夫」が集まっていた。また項羽については、書や剣には興味を示さず、多くの人を動かす兵法には関心を持ったがそれを究めるには至らなかったとされる。

この時期の項羽に関して、始皇帝を見て取って代わらんとする意気込みを語った項羽を項梁が諫めたエピソードが知られている。

秦の始皇帝が会稽に行幸し、浙江を渡った時、項梁と項羽は一緒にその様子を見た。項

羽は言った。「彼にとって代わりたいたいものだ」。項梁は項羽の口を押さえて「滅多なことを言うな。族刑にされるぞ」と言った。しかしこのこと以降、項梁は項羽のことを奇傑とみなすようになった。

秦始皇帝游会稽、渡浙江、梁与籍（項羽）俱觀。籍曰「彼可取而代也」。梁掩其口、曰「毋妄言、族矣」。梁以此奇籍。

王朝に対する反逆の意志の表明ともとられかねない項羽の言葉は、彼の人格を端的に表現するものと意味づけられてきた。武田泰淳はこの言葉を「項羽の気宇の壮大さと単純率直さをよく示している」<sup>14</sup>ものとする。このエピソードが高祖本紀に見える劉邦のそれと対になっていることは容易に理解されよう。

高祖はかつて咸陽に徭役で出向いたとき、たまたま始皇帝を見ることができた。高祖は大きなため息をついて、「ああ、男子たる者あのようにでありたいものだ」と言った。

高祖常繇咸陽、縦觀、觀始皇帝。喟然太息曰、「嗟乎、大丈夫當如此也」。

項羽が始皇帝に取って代わらんとする野望をあからさまに見せたのに対し、始皇帝を見た劉邦は、始皇帝を称賛しつつ嘆息したという。これに関して武田は次のように述べる。

この一節も高祖の気宇の壮大さを物語るものであるが、項羽の言葉とはおのずから異なっている。粗暴で烈火のようにもえさかる項羽の気性とはちがひ、智略があり計画的なわりにはどこか受身な高祖の性格がしのばれる。「項羽本紀」と「高祖本紀」の各々に、こうして同じような情景を書きとめておいたのは、司馬遷の工夫である。<sup>15</sup>

また武田は「怒る」という言葉に注目し、

「項羽本紀」には「怒る」と云う文字がよく出てくる。何かあると項羽は怒る。そして動作を起すのである。……まことに項羽の怒りははげしい。怒りにかりたてられて一生を終っている。「笑う」などという文字はほとんど見えない。項羽はいよいよ自分が最期をとげる前に一回笑っただけである。……ところが「高祖本紀」の方には「怒る」と云う文字がほとんどない。「怒る」という文字が出てきても、「怒る」人はみな項羽である。高祖はほとんど怒らない。ただ一回、臣下のものがあまり立派な宮殿をこしらえたのを見て、どうしてこの非常時にこんな馬鹿な真似をするか、と怒っただけである。この一回も陰性で計画的で、雷電のような項羽の怒りとはくらべものにならない。対立する二つの中心の一方が怒ってばかりいるのに、一方はまるで怒らないのである。<sup>16</sup>

という。

確かに項羽の怒りは数万人を穴埋めにして殺害するほどの激烈さを幾度も示す。これに対して劉邦は滅多に怒りを見せない。たとえば蜂起の初期に雍齒に裏切られて豊邑を失った時、劉邦は「病」み、雍齒を「怨」んだという。普通なら怒ってもよさそうな場面でも劉邦はそうせず、ショックで「病」んだり相手を「怨」んだりするのである。

これらの対比的な記述は、勇猛かつ残酷な武人としての項羽と、仁にして人を愛し施しを好む寛容な性格の長者としての劉邦という、後に様々に変形されながら語り続けられる性格描写

の原点と言ってよい。

#### 4 『史記』の中の項羽と劉邦(2)

項羽本紀と高祖本紀を読み比べた時、もう一つ、容易に気付くことができる相違点がある。それは高祖本紀にしばしば神怪な超自然的現象が見出されること、そして項羽本紀にはそのような記事がほとんど見えないことである。『史記』高祖本紀が記録する劉邦の前半生は、劉邦と神的な世界との特別な関係を示唆する説話的記述に満ちている。

そもそも劉邦が生まれたのは、「大沢の陂」で眠っていた母が夢の中で神に遇ったことによる。そのとき空は真っ暗になり雷が鳴り、父太公は劉邦の母である劉媪の上に蛟龍がいるのを見たという。劉邦は龍に感じた母から生まれたとされており、そのためか長じても酔って寝ているときの上には常に龍が見えたというのである。

また劉邦は酈山に送る人夫たちを豊の西沢で解き放ち秦への反抗を開始する。その時の記事には、酔って沢中を歩きながら大蛇を切断したことが記され、その大蛇が実は「白帝の子」で、それを斬った劉邦が実は「赤帝の子」だったことが示唆されている。さらに始皇帝の「東南に天子の気がある」との言に対して、劉邦はそれは自分のことかと恐れ、「山沢巖石の間」に隠れたという。しかし妻の呂后は劉邦のいる場所にいつもたどりつくことができた。その理由は、呂后の言によれば、劉邦の上には常に雲気があったからだという。

これらの事象は「沢」と強いつながりを持っており、蜂起した頃までの劉邦に関する記録は神怪な現象が頻発する場としての沢をしばしばその舞台としていた。当時の沢はこれらの神怪な現象が発生するにふさわしい場と考えられていたのである。高祖本紀に記された劉邦に関する主に沢を舞台とする少なからぬ怪異は、無頼の集団のリーダーたり得る劉邦の異能を証明するものととらえられた。そして長者たる劉邦の人格とそれらの怪異が一体となって、劉邦の周りに人々を結集する力として機能していたと言えよう<sup>17</sup>。

これに対して、項羽の生涯には劉邦に見られたような神怪な現象はほとんど付随していない。高祖本紀に劉邦の超常的出生譚が見られるのに対して、項羽本紀には項羽が誕生した状況に関する記事はその両親に関するものを含めて全く存在しておらず、項羽の両親が誰なのかは『史記』からはわからない。そしてこのこと自体が『史記』本紀中においては例外的な事象であることはここで指摘しておかなくてはならない。

『史記』の本紀においては、世界の王者となった人物とその系譜が記され、また王者の家系の起点には異常懐妊がしばしば記録される。殷・秦の祖先は玄鳥の卵を呑むことで、周の祖先は巨人の足跡を踏むことで懐妊したとされており、このような叙述パターンの存在を踏まえるならば、漢の開祖である劉邦が異常懐妊に関する説話を持っていることは『史記』の内的世界においてはごく自然なことなのである<sup>18</sup>。当然ながら『史記』本紀に列される漢の皇帝たちはみな異常懐妊によって誕生した高祖の子孫ということになる。そして以上のような基本的叙述パターンを有する『史記』本紀の中で、両親のことがわからず誕生時の状況にも一切言及され

ない王者は項羽のみである<sup>19</sup>。

蜂起前の項羽について項羽本紀には、八尺余の長身かつ鼎を持ち上げるほどの大力の持ち主で、才気に優れ呉中の子弟に恐れられる人物だったと記録されている。また項羽本紀中には自らの敵を虐殺する項羽の姿がしばしば描かれる。項梁に派遣されて陥落させた襄城では敵を穴埋めにし、項梁死後には章邯とともに降ってきた秦軍二十四万をまたも穴埋めにして殺した。救趙戦争を開始する際には上將軍宋義を楚懷王の命と偽って殺害し、入関時には劉邦が許し生かしておいた秦の降王嬰を殺害し、劉邦が保全しておいた咸陽の秦宮殿を焼き尽くし、さらに後には義帝をも黥布らに命じて殺害させた。項羽は、周囲の人々に恐怖を感じさせる、またその「怒り」によって既存の事物を徹底的に破壊する、いささか異常の感を禁じ得ない行動を取り続ける存在として『史記』にあらわれる。しかしそれらの記事の中には、高祖本紀で劉邦の周りにしばしば出現するような神怪な要素はほとんど見出すことができないのである。

## 5 アウトローとしての項羽

ここまで二節にわたって検討したように、『史記』の記す項羽像は様々な面で高祖劉邦と対照的である。しかし実際のところ項羽と劉邦はそれほどまでにあらゆる面において対極的な性格を有する存在だったのだろうか。これに関して筆者が注目してみたいのは、前節で論及した、項羽における神的世界とのつながりの欠落の問題である。

この問題について考えるために、項羽本紀に見える二つの記事は何らかのヒントを与えてくれるかもしれない。その第一は項梁集団蜂起時の記事である。

秦二世元年七月、陳渉らが沢中にて蜂起した。その九月、会稽守通は項梁に言った。「江西はみな秦に反し、今こそまさに天が秦を滅ぼさんとする時である。私は『先んずればすなわち人を制し、後ればすなわち人の制する所となる』と聞いている。私は兵を挙げて、あなたと桓楚を將軍としようと思う」。この時桓楚は逃亡して沢中に身を隠していた。項梁は言った。「桓楚は亡命しており、その所在を知る者はおりませんが、項羽のみはその場所を知っております」。項梁は外に出て、項羽に剣を持たせて外で待たせた。項梁は再び室内に入り、守通の前に座して言った。「項羽を呼び、桓楚を召し出すための命を受けさせましょう」。守は「よかろう」と言った。項梁は項羽を召し入れた。しばらくして、項梁はひそかに項羽に「やれ」と言い、そこで項羽は剣を抜き守の首を斬った。

秦二世元年七月、陳渉等起沢中。其九月、会稽守通謂梁曰「江西皆反、此亦天亡秦之時也。吾聞先即制人、後則為人所制。吾欲發兵、使公及桓楚將」。是時桓楚亡在沢中。梁曰「桓楚亡、人莫知其處、獨籍知之耳」。梁乃出、誠籍持劍居外待。梁復入、与守坐、曰「請召籍、使受命召桓楚」。守曰「諾」。梁召籍入。須臾、梁胸籍曰「可行矣」、於是籍遂拔劍斬守頭。

桓楚と項梁を將軍にしたいとの会稽守通の言に対して項梁は、沢中に亡命し居場所のはっきりしない桓楚について、項羽であればその行き先を知っていると答えた。会稽守通もそれを認

めて、項羽に対して桓楚を召しだすべしとの命を下そうとしている。

前節でも若干ふれたように、当時の「沢中」、すなわち池・湖などが点在する低湿地である「沢」の内部は、日常の生活空間とは性格を異にする、神怪な事象が発生しても不思議のないある種の異空間だった。同時に「沢」は、アウトローや亡命者などの雲集する、政治的支配の網の目から漏れ落ちた場であることも多かった<sup>20</sup>。劉邦が秦への反抗を開始した場所は豊の西「沢」で、武装集団を結集し潜んでいた場所も「沢」中だった。陳勝集団が「大沢郷」で決起し<sup>21</sup>、彭越を中心とする少年たちの集団が結成されたのが「沢中」だったように<sup>22</sup>、「沢」は反体制的な無頼集団の結集を想起させる空間という一面を持っていた。そして項梁の発言、及びそれを認めた会稽守通の対応からすれば、項羽は沢中とのつながりを持つ、沢中の無頼たちと接触を持っていても特に不自然ではない存在だったものと思われる。しかし、項羽と「沢」中の関係がうかがわれる箇所は、『史記』には項羽本紀のこの部分くらいしかない。

項氏については戦国楚の将軍項燕の子孫であることがしばしば指摘され、その旧六国貴族としての性格が強調されることが多い。民衆運動史・農民戦争史の枠組みの中でも項梁・項羽に対してはしばしば「六国旧貴族」・「六国貴族分子」といった性格付けがなされてきた<sup>23</sup>。しかしそもそも項梁自身は、

項梁は殺人を犯し、項羽とともに呉中に逃れて仇討を避けた。呉中の「賢士大夫」はみな項梁のもとに集まってきた。

項梁殺人、与籍避仇於呉中。呉中賢士大夫皆出項梁下。(項羽本紀)

とあるように、殺人の仇を避けるために呉中へ逃亡してきた人物である。そしてそのような立場である項梁のもとに集まった「賢士大夫」の中には、游侠に類するいわばヤクザ者が少なからず含まれていたことが推測可能だろう。蜂起以前における項梁・項羽の交友関係の中には少なからぬアウトローたちが含まれていたものと思われる。

戦国韓の宰相の子孫である張良も下邳で「任侠」の徒となるに至っていたように、六国の高位者の一族でも秦末には社会的位置が無頼の徒に近い状態になっている場合があった。また張良に関しては「項伯常殺人、従良匿」<sup>24</sup>との記事があり、項氏の一族で後に項梁・項羽と行動を共にしている項伯が殺人を犯し張良らの無頼の徒の中でかくまわれていたとされている。戦国楚の滅亡から数十年がたち、旧楚の将軍の一族として秦帝国支配下では民間社会に沈潜していたと思われる項氏の状況を慮るならば、そもそも項梁ら自身が游侠無頼の徒と大差ない存在になっていたと見た方がよいかもしれない。

そして以上の推測に大過ないとすれば、『史記』は項羽のそのようなアウトローとしての側面を強調して記すことを敢えて避けているのだと考えることができよう。項羽には沢中の人々との少なからぬつながりがあったにもかかわらず、『史記』はそのことに極力触れようとしない。『史記』における沢中とは、神怪な事象の発生とアウトローたちの結集を想起させる空間である。そしてそこは同時に高祖劉邦に関連する諸事象を連想させずにはおかない、劉邦と強いつながりを持った空間でもあった。いわば項羽は、劉邦の対極的存在としての役割を割り振られるた

めに、劉邦に関する記録において強調されたある側面を欠落させることになった存在なのである。垓下を脱出した項羽が道を誤り漢軍に追いつかれた場所が「大沢中」とされているのは、項羽と「沢」の関係を象徴的に示す事例と思われる。

## 6 項羽と古帝王

項羽と劉邦の対比に関する第二の記事は、項羽本紀末尾近くの「太史公曰」の中に見える次の記述である。

私が周生に聞いたことだが、舜の目は重瞳子（一つの目の中に瞳が二つ）だったという。項羽もまた重瞳子だったと聞いている。項羽は舜の苗裔なのだろうか。なんと速やかな勃興だったことであろうか。

吾聞之周生曰、舜目蓋重瞳子、又聞項羽亦重瞳子。羽豈其苗裔邪。何興之暴也。

項羽の目の中には瞳が二つあったという。項羽に関する記録の中でほとんど唯一の神怪な事象に関する記録と言えよう。劉邦の身体的特徴については「隆準而龍顏、美須髯、左股有七十二黒子」（高祖本紀）という記事が見えるが、それらは人間の身体に関して常識的に理解できる範囲を超えるものではない。高祖本紀には、呂太后の父親が劉邦の人相を比類ないものと見なして娘を嫁がせることにしたり、劉邦が亭長時代に通りがかった老父から言葉にできないほどの貴人の相を持つことを指摘されたりといった記事が残されている。しかしこれらは人相を見ることが特に珍しいことでない、知識人の教養のような一面すら持っていた時代相を鑑みれば異とするに足りない<sup>25</sup>。身体的特徴に関する記述という面から見ても、項羽と劉邦は対照的である。

またこの記事は、「重瞳子」という身体的特徴を持っていることを理由に、項羽が古帝王たる舜の子孫であることを示唆するものである。『史記』本紀に立てられている漢より前の古帝王と王朝、すなわち五帝と夏・殷・周・秦は『史記』の述べるところによれば全て黄帝を始祖とする系譜上に位置している。これに対して始皇帝は呂不韋の子である可能性が呂不韋列伝に明記されており、黄帝に始まる系譜上に位置を占めるかどうかあいまいな部分を持っている。また項羽は舜と共通する身体的特徴を有し古聖王の末裔としか考えられないような画期的業績を挙げた人物で、古帝王の末裔である可能性を持つことは項羽が本紀に列される理由の一つになっていると考えられる。しかし、項羽は身体的特徴によってしか古帝王との関係を推測することのできない、その系譜的位置のあいまいな人物でもあった。

これらと異なり、『史記』における劉邦には黄帝との関係を示唆する記述が一切見出されない。上述の如く劉邦は母が沢中で龍に感じて生まれたとされる。既に述べたように、母親が人間世界を超えた神怪な存在と接触することで王者の先祖が生まれるいわゆる感生帝説話は『史記』本紀が王者の始祖について述べる際の基本的叙述パターンであり、このことは漢王朝の始祖たる劉邦にもあてはまる。しかし感生帝説話を有する殷・周・秦が黄帝以来の系譜上に位置づけられているのは異なり、『史記』内部において劉邦が古帝王たちとの系譜的關係を示唆され



ることはない。劉邦はそれ以前の王者たちと全く関係を持たない、世界の新しい王者として『史記』の中に出現するのである<sup>26</sup>。この点についても、古帝王の子孫である痕跡を有する項羽は、古帝王との関係を一切持たない劉邦のネガというべき存在である<sup>27</sup>。

本紀は『史記』の世界観の基本構造を示す部分であり、項羽本紀はそこで王者の一人に設定された項羽に対する顕彰文的な性格を持っている。しかし同時に項羽は劉邦によって克服されるべき必然性を持った人物である必要もあった。太史公自序には次のように記されている。

秦がその道を失い、豪傑たちが乱れ起こった。項梁はここに反秦の事業を起し、項羽がそれを受け継いだ。宋義を殺し趙を救って、諸侯は項羽を推戴した。秦王嬰を誅殺し懷王に背いたので、天下はこれを非とした。項羽本紀第七を作った。

秦失其道、豪傑並擾。項梁業之、子羽接之。殺慶救趙、諸侯立之。誅嬰背懷、天下非之。作項羽本紀第七。

また高祖本紀について太史公自序は次のようにいう。

項羽は暴虐だったが、漢は功德を行った。蜀漢の地で発奮し、関中に帰って三秦を平定した。項羽を誅殺し皇帝となり、天下を安んじて、制度を改め風俗を易えた。高祖本紀第八を作った。

子羽暴虐、漢行功德。憤發蜀漢、還定三秦。誅籍業帝、天下惟寧、改制易俗。作高祖本紀第八。

秦を滅ぼしたのは『史記』の認識によれば項梁の業績を受け継いだ項羽である。故に対秦戦争過程における項羽の功績そのものは大いに顕彰されなければならない。しかし漢は天下の民心を失った項羽を討つことで天下を安定させたのだから、項羽は最終的には劉邦によって打倒される必然性も持っていなくてはならなかった。『史記』においては項羽の功績の隔絶性は舜の末裔である可能性によって説明された。そして劉邦は、黄帝以来継承されてきた王権を項羽を滅ぼすことで最終的に断絶させ、それと無関係な新しい世界を切り開くことになった。劉氏の漢王朝を賛美する基本的志向を持った書物としての『史記』<sup>28</sup>が項羽と劉邦に関する叙述の中で表現しようとしたのはそのような一連の事実関係だったのである。

## 7 おわりに

以上、本稿では、武田泰淳の指摘に示唆を受け、項羽本紀と高祖本紀を基本的な素材として、項羽と劉邦を対比してそれらを人格・行動パターン・人間関係・系譜関係などの様々な面において対照的な存在として描き出そうとする『史記』の記述の傾向について検討した。項羽は、劉邦が色濃く有している側面、アウトローの世界や神的世界とのつながりを削り取られた姿で、言わば劉邦のネガとして『史記』の中に存在させられている。しかし同時に『史記』にとっての項羽は秦を滅ぼし漢王朝成立の前提を作った者でもあった。『史記』は項羽の功績のある面において顕彰し、劉邦が打倒・克服するにふさわしい対象として項羽を本紀に列したのである。とすれば『史記』には、項羽を克服して生まれてきたものとして漢王朝を描き出すために、楚

の覇業を項梁・項羽中心に描いている面があるのではないか。

若干具体的な例を挙げておこう。薛において擁立された楚懷王は傀儡的存在と評価されることが多い。項羽本紀では、范増の言を是とした「項梁が懷王を立てた」としているし、以後の楚の動きも項梁・項羽が率いる軍団の動きを中心に描かれる。この時代に関する概説的記述においても懷王・義帝に政治の実権がないとみなすのはごく一般的である<sup>29</sup>。しかし『史記』の記述を追ってみると、項梁が楚の実権を握っていたことを無条件に前提としてよいかどうかは疑問があるし、特に十八王封建以前の懷王は単なる傀儡とは考えにくいように思われる。

懷王即位時に上柱国に任じられたことが記録されるのは陳嬰である。項梁は「自ら武信君と号した」とされるのみで、楚国の政権中枢にいかなる地位を占めたかは明らかではない。懷王擁立までの項梁は陳勝政権支持の立場をとっており、その延長線上に実質的な君主として楚懷王を擁立した可能性も考えられよう。項梁戦死後、懷王は都を主戦場により近い彭城に移し、項羽らの軍団を直接統括する。以後も項羽の動きは懷王の意志に強く規制されており、劉邦とともに西進を望んだ項羽の意志は懷王によって否定されている<sup>30</sup>。

また彭城への遷都を『史記』は懷王が「恐」れてのこととするが、恐怖のために戦場に近いところに移動するというのは理解しにくい<sup>31</sup>。『史記』の「恐」れてとの叙述は懷王の傀儡性と人格的脆弱性を強調するための表現と見るべきではないか。換言すれば『史記』の関連部分においては多くの場合、楚の中心に常に項梁・項羽がいたという『史記』の構想に沿った事実関係を強調する編纂・叙述がなされていると考えられるのである。

本稿で行うことができたのは周知の史料のみを用いた初歩的な考察に過ぎない。項羽本紀に記された歴史像を実際の歴史的過程の中に意味づけてゆく作業は、全て別稿<sup>32</sup>に委ねられることになる。

## 註

- 1 柴田昇「陳勝論ノート－陳勝呉広の乱をめぐる集団・地域・史料－」（『名古屋大学東洋史研究報告』35、2011）。
- 2 『後漢書』班彪伝。
- 3 劉知幾『史通』本紀。
- 4 エドゥアール・シャヴァンヌ『司馬遷と史記』（新潮選書、岩村忍訳、1974）168頁。
- 5 バートン・ワトソン『司馬遷』（筑摩叢書、今鷹真訳、1965）152頁。
- 6 バートン・ワトソン『司馬遷』153頁。
- 7 竹内康浩『「正史」はいかに書かれてきたか』（大修館書店、2002）66頁。
- 8 吉本道雅『史記を探る』（東方書店、1996）207～208頁。
- 9 吉本道雅『史記を探る』214頁。
- 10 藤田勝久「『史記』項羽本紀と秦楚之際月表－秦末における楚・漢の歴史評価－」（『東洋史研究』54－2、1995）52頁。

- 11 宮崎市定「史記を語る」(『宮崎市定全集5 史記』岩波書店、1991、1979 初出) 43～44 頁。
- 12 宮崎市定「史記を語る」(『宮崎市定全集5 史記』) 19 頁。
- 13 武田泰淳『司馬遷－史記の世界－』(講談社文庫、1972、1943 初出) 81 頁。
- 14 武田泰淳『司馬遷－史記の世界－』82 頁。
- 15 武田泰淳『司馬遷－史記の世界－』82～83 頁。
- 16 武田泰淳『司馬遷－史記の世界－』83～84 頁。
- 17 柴田昇「秦末の抵抗運動」(吉尾寛編『民衆反乱と中華世界－新しい中国史像の構築に向けて－』汲古書院、2012) 200 頁。
- 18 柴田昇「『史記』の歴史観に関する覚書」(『愛知江南短期大学紀要』35、2006) 50～55 頁。
- 19 呂太后の場合は、本紀中にその系譜・異常懐妊に関する記事を見出すことはできないが、少なくとも高祖本紀に父母の存在が明示されている点で項羽とは異なる。『史記』呂太后本紀の性格については稿を改めて論じたい。
- 20 柴田昇「秦末の抵抗運動」190～196 頁。山沢にしばしば民が逃げ込んだこと、国家支配の及ばぬ領域としての山沢の世界と在地社会との間に密接なつながりがあったことについては大櫛敦弘も項羽と桓楚の例を挙げつつ言及している。大櫛敦弘「桃源の形成－戦国秦漢期の「外延領域」に関するノート－」(平成9年教育改善推進費(学長裁量経費)研究成果報告書『「環境問題」から見た中国史』、研究代表者：遠藤隆俊、1998) 12 頁。なお中国古代の山林藪沢の概要については、村松弘一「中国古代の山林藪沢－人間は自然環境をどう見たか－」(『学習院史学』43、2005)。
- 21 『史記』陳涉世家。
- 22 『史記』魏豹彭越列伝。
- 23 孫達人『中国古代農民戦争史 第一巻』(陝西人民出版社、1980) 37～40 頁、謝天佑・簡修煒『中国農民戦争簡史』(上海人民出版社、1981) 12 頁等。
- 24 『史記』留侯世家。
- 25 戦国期における相人術への批判は『荀子』非相篇に見られる。漢代の看相については、祝平一『漢代的相人術』(台湾学生書局、1990) に詳しい。
- 26 以上の点に関しては柴田昇「『史記』の歴史観に関する覚書」で概述した。
- 27 そのような『史記』の論理は『漢書』において大きく書きかえられ、劉邦は堯の後裔とされる。『史記』と『漢書』に見えるほとんど同じ文章が場合によっては大きく異なった意味を託されていることについては、柴田昇「『漢書』初探－『漢書』の成立と発想に関する初歩的研究－」(柴田昇編著『『漢書』とその周辺－秦漢文献資料研究－』崑崙書房、2008) を参照。
- 28 柴田昇「『史記』の歴史観に関する覚書」56 頁。
- 29 たとえば宮崎市定は「項羽は故国の楚王の後を立てて義帝とし、これを名目上の主権者としたが、実権は何も与えなかった」(『宮崎市定全集1 中国史』岩波書店、1993、131 頁) とし、西嶋定生も「西楚の霸王項羽は楚の義帝を推戴していた。しかし、それは名目的なものであり、その存在が邪魔になると、九江王英布(=黥布)に命じて、これを殺してしまった」(『秦漢帝国』講談社学術文庫、1997、95 頁)

とする。ごく最近の概説でも藤田高夫は懐王を「名目的盟主」と述べ（愛宕元・富谷至編『新版中国の歴史 上【古代－中世】』昭和堂、2009、95頁）、佐竹靖彦も「項梁が心を第二の懐王として擁立したのは、御都合主義の立場に立って、傀儡としての利用をめざしたからであると思われる」（『項羽』（中央公論新社、2010、111頁）とする。ただし佐竹は項梁死後の情勢に関して「項羽は楚国の民衆と同様に、……楚の懐王への献身こそが、楚人とりわけ楚の軍人にとっての当然の行為であると思定めていた」（151頁）と述べており、楚における懐王の存在感と政治的力量を高く評価しつつ楚漢抗争史を総合的に描き出すことを試みている。

30 『史記』高祖本紀。

31 この記事について佐竹靖彦は、『楚漢春秋』が「経験を積み十分な判断能力をもった懐王が、項羽がまだ若年であって天下を支配する能力がないことを「恐れて」みずから前線に出てきてことの処理にあたったという文脈で「恐れて」という語句を使い、『史記』はそれにもとづいて懐王は「恐れた」と述べたとする。佐竹靖彦『項羽』145～147頁。

32 柴田昇「項羽政権の成立」（『人文論集』63-2、静岡大学人文社会科学部、2013）にその一端を示した。